

実践授業における学生の気づき
—レクリエーション発表会をとおして—

Of the Student from Practice Class Notice it
—Through Recreation Announcement Society—

栗 林 千 幸

KURIBAYASHI Chiyuki

実践授業における学生の気づき —レクリエーション発表会をとおして—

Of the Student from Practice Class Notice it
—Through Recreation Announcement Society—

栗 林 千 幸

KURIBAYASHI Chiyuki

介護福祉士の資格を取得するための科目の中に「レクリエーション活動援助法」があり、介護福祉士2年養成課程では60時間の必修科目となっている。本学専攻科は保育士養成施設等卒業者対象1年課程であり、「レクリエーション」の名のつく科目が開講されていない。レクリエーションについて学ぶ機会をもつため、平成18年度より2年間、第2段階実習終了後にレクリエーション発表会を実施している。実習先で実際に行ってきたレクリエーションを、実習中の経験と反省をふまえ、発表することとした。発表者、利用者、発表サポート、見学者の4つの役割を全て体験することで、学生に「利用者の障害への配慮」「利用者の気持ち」「事前準備と連携の大切さ」についての気づきが見られた。

キーワード：レクリエーション、実践授業、介護、施設、介護実習

Key Words: Recreation, Practice class, Care, Institution, Care training

I. はじめに

本学専攻科は保育士養成施設等卒業者対象1年課程であり、「レクリエーション活動援助法」の授業が設置されていない。また、「レクリエーション活動援助法」は保育士養成課程の必修科目にも指定されておらず、レクリエーションという言葉が含まれる科目も必修科目ではなく、保育士養成施設等卒業者は保育実習において保育案を計画し、準備して実践するという経験も実施している¹⁾が、その対象は乳幼児であって高齢者ではない。高齢者に対するレクリエーション活動援助に関して、専門的に学ぶ時間が設定されていないのである。

保育士養成施設等卒業者対象1年課程では1年間に360時間の介護実習が義務付けられており、本学専攻科では第2、第3段階実習でレクリエーションの企画、

実施を課題としている。実習中にレクリエーションの企画、実施を行うが、実習が終わればそれで終わってしまい、そこで得た学びが継続されない現状がある。そこで、本学専攻科では平成18年度より、第2段階実習終了後にレクリエーション発表会を行い、実習で行ってきたレクリエーションを、実際の経験と反省をふまえて発表することとした。また発表の他に、利用者役、見学者役、発表サポート役の3つの役も一度ずつ体験することとし、それぞれの立場からレクリエーションを体験し、学びを振り返る機会を設けた。以下では、発表会実施の流れと、2年間の実施を通して学生の気付きや学びについて考察する。

Ⅱ. レクリエーション発表会

1) 実施のねらい

第2段階実習での学びを振り返る。
 学んだことや反省をいかす。
 他の学生の発表から学ぶ。
 発表者や利用者の様子を客観的に観察する。
 利用者の立場から「レクリエーション活動援助」
 について考える。
 全体で学びを共有する。
 事前準備の重要性を認識する。
 レクリエーションのレパトリーを増やす。

2) 役割

発表者、利用者、見学者、発表サポートに分かれて参加する。全員がすべての役を体験できるようにする。

発表者	第2段階実習施設ごとに発表を行う。
利用者	利用者はさまざまな障害を想定して、参加する。 ①難聴（両耳に耳栓をつける）②全盲（アイマスクをつける）③視覚障害、白内障（色つきのサングラスをかける）④片マヒ、車椅子（利き手側の肘、膝にサポーターをつける）⑤下肢筋力低下、車椅子（両踝に重りをつけ、動かし辛い状態にする）⑥視覚障害、視野狭窄（視野を狭くしたサングラスをかける）⑦片マヒ、杖歩行（利き手側の肘、膝にサポーターをつける） （⑥、⑦については18年度のみ実施）
見学者	レクリエーションには参加せず、離れたところから発表の様子、利用者の様子を見学する。
発表サポート	発表者から指示をうけて発表のサポートをする。

3) 発表前の指導

発表会のねらいを学生に伝え、第2段階実習での反省や指導者からの評価、助言をふまえて再度企画書を作成すること、実習時とは実施場所の広さや設定時間、利用者の人数や状態も違うため、部屋の使い方や進行についてグループで十分話し合い、企画を立案するように指導した。また、発表サポート役の学生と連絡をとり、レクリエーションの内容、どのように進めるのか、どのようにサポートしてほしいのか伝えるように指導し、説明から企画書提出までの期間を1週間とした。

4) 実施内容

①平成18年度

学生数	24名
実習施設数	10施設（介護老人福祉施設5、介護老人保健施設4、重症心身障害児・者施設1）
発表内容	エンドレスサッカー・ソーラン節・季節の歌（幸せなら手をたたこう）・ジャンケンゲーム・炭坑節を楽しみながら身体を動かす・さいころことわざゲーム・お手玉入れゲーム・楽器を使い楽しもう（もしもしかめよ）・みんなでクイズ・ボール回し

②平成19年度

学生数	28名
実習施設数	9施設（介護老人福祉施設4、介護老人保健施設4、重症心身障害児・者施設1）
発表内容	踊り（炭坑節）を見て聴いて踊って一緒に楽しむ・秋の音楽歌謡祭・きこエクササイズ・身体を使ったリズム遊び・的当てゲーム・もの送りゲーム・的入れ・季節を感じていただく（紙芝居）

実施場所は本学介護実習室、各グループ25分間で発表を行った。実施の流れは表1のとおりである。

Ⅲ. 実践をとおして

発表会終了後、各役割の立場から気づいたこと、感じたことをレポートにまとめるようにした。また利用者役には、発表者に対して7つの項目への5段階評価と、気付いたことを自由に記入する用紙（表2）を配布した。見学者役には、利用者役と同様の5段階評価と、見学者役からみた利用者役の様子、気付いたことなどを記入する用紙（表3）を配布した。

1) 発表者として

企画段階での準備不足、発表サポート役との話し合い不足、使用物品の準備不足など、様々な面において事前準備が不足していたと振り返った学生がほとんどだった。

まず企画段階においては、企画書の内容に曖昧さが目立った。誰が何をするのか役割分担が明確に記入さ

表1 レクリエーション実施予定表 (平成18年度)

レクリエーション実施予定表 平成18年 11月21日(火) 3・4・5限 介護実習室												
※1グループ25分(入れ替えの時間も含む)												
※施設名横の数字は人数												
時間	発表	サポート	見学者	利用者								利用者数 合計
				耳栓 (難聴)	アイマスク (全盲)	サングラス (視覚障害)	サングラス (視野狭窄)	杖 (片マヒ)	車椅子 (片マヒ)	車椅子 (下肢筋力 低下)		
				耳栓をつける	アイマスクをつける	色つきサングラスをかける	視野の狭くなったサングラスをかける	肘と膝にダンボールを挟んでサポーターをつける			両足首に黒の重りをつける	
1	13:15-13:40	老福A・2	老福B・3	老福J・3	老福C・2	老福D・2	老健E・3	老健F・2	老健G・2	老健H・3	重症心身障害児者I・2	16
2	13:40-14:05	老福B・3	老福C・2	老福A・2	老福D・2	老健E・3	老健F・2	老健G・2	老健H・3	重症心身障害児者I・2	老福J・3	17
3	14:05-14:30	老福C・2	老福D・2	老福B・3	老健E・3	老健F・2	老健G・2	老健H・3	重症心身障害児者I・2	老福J・3	老福A・2	17
4	14:40-15:05	老福D・2	老健E・3	老福C・2	老健F・2	老健G・2	老健H・3	重症心身障害児者I・2	老福J・3	老福A・2	老福B・3	17
5	15:05-15:30	老健E・3	老健F・2	老福D・2	老健G・2	老健H・3	重症心身障害児者I・2	老福J・3	老福A・2	老福B・3	老福C・2	17
6	15:30-15:55	老健F・2	老健G・2	老健E・3	老健H・3	重症心身障害児者I・2	老福J・3	老福A・2	老福B・3	老福C・2	老福D・2	17
7	15:55-16:20	老健G・2	老健H・3	老健F・2	重症心身障害児者I・2	老福J・3	老福A・2	老福B・3	老福C・2	老福D・2	老健E・3	17
8	16:30-16:55	老健H・3	重症心身障害児者I・2	老健G・2	老福J・3	老福A・2	老福B・3	老福C・2	老福D・2	老健E・3	老健F・2	17
9	16:55-17:20	重症心身障害児者I・2	老福J・3	老健H・3	老福A・2	老福B・3	老福C・2	老福D・2	老健E・3	老健F・2	老健G・2	16
10	17:20-17:45	老福J・3	老福A・2	重症心身障害児者I・2	老福B・3	老福C・2	老福D・2	老健E・3	老健F・2	老健G・2	老健H・3	17
老福:介護老人福祉施設 老健:介護老人保健施設 重症心身障害児者:重症心身障害児者施設												

表2 利用者記入用紙

レクリエーション	利用者記入用紙					氏名()
発表グループ()						役名()
1 時間配分	5	4	3	2	1	<その他、気づいた事>
	大変良い	良い	普通	やや悪い	悪い	
2 役割分担	5	4	3	2		
3 進行	5	4	3	2	1	
4 形態(位置)	5	4	3	2	1	
5 準備	5	4	3	2	1	
6 利用者への配慮(挨拶・声の大きさ・状態に合わせた配慮等)	5	4	3	2	1	
7 連携は取れていたか(グループ間、サポート学生間ともに)	5	4	3	2	1	
発表グループ()						役名()
1 時間配分	5	4	3	2	1	<その他、気づいた事>
	大変良い	良い	普通	やや悪い	悪い	
2 役割分担	5	4	3	2		
3 進行	5	4	3	2	1	
4 形態(位置)	5	4	3	2	1	
5 準備	5	4	3	2	1	
6 利用者への配慮(挨拶・声の大きさ・状態に合わせた配慮等)	5	4	3	2	1	
7 連携は取れていたか(グループ間、サポート学生間ともに)	5	4	3	2	1	
発表グループ()						役名()
1 時間配分	5	4	3	2	1	<その他、気づいた事>
	大変良い	良い	普通	やや悪い	悪い	
2 役割分担	5	4	3	2		
3 進行	5	4	3	2	1	
4 形態(位置)	5	4	3	2	1	
5 準備	5	4	3	2	1	
6 利用者への配慮(挨拶・声の大きさ・状態に合わせた配慮等)	5	4	3	2	1	
7 連携は取れていたか(グループ間、サポート学生間ともに)	5	4	3	2	1	

表3 見学者記入用紙

レクリエーション 見学者記入用紙						
見学したグループ()		氏名()				
1	時間配分	5 大変良い	4 良い	3 普通	2 やや悪い	1 悪い
<input type="text"/>						
2	役割分担	5 大変良い	4 良い	3 普通	2 やや悪い	1 悪い
<input type="text"/>						
3	進行	5 大変良い	4 良い	3 普通	2 やや悪い	1 悪い
<input type="text"/>						
4	形態(位置)	5 大変良い	4 良い	3 普通	2 やや悪い	1 悪い
<input type="text"/>						
5	準備	5 大変良い	4 良い	3 普通	2 やや悪い	1 悪い
<input type="text"/>						
6	利用者への配慮(挨拶・声の大きさ・状態に合わせた配慮等)	5 大変良い	4 良い	3 普通	2 やや悪い	1 悪い
<input type="text"/>						
7	連携は取れていたか(グループ間、サポート学生間ともに)	5 大変良い	4 良い	3 普通	2 やや悪い	1 悪い
<input type="text"/>						
8	利用者の様子	<input type="text"/>				
9	ここはよかったと思った点	<input type="text"/>				
10	ここはこうすればよかったと思った点	<input type="text"/>				
11	その他、気づいた事	<input type="text"/>				
12	実施学生へメッセージ	<input type="text"/>				

れておらず、企画書を見ただけでは誰が何を担当するのか把握できないグループが多々あった。誰が物品の準備を行うのか、誰が利用者の誘導を行うのか、誰がどのような動きをするのか、不明確であった。そのために発表サポート役が自分が何をすればいいのかわからず、呆然と立ち尽くしてしまう姿も見られた。その場で発表者が指示するものの、焦りからか的確さに欠け、発表サポート役は結局動くことができず、発表者がバタバタと動き回る状況があった。結局その場の雰囲気はあわただしくなり、利用者役も落ち着いて参加することができなかった。

また、どの利用者がどこに座るのか、どの向きで会場をセッティングするのかということも紙面からは理解できないグループがあった。企画を立案し、企画書を作成した学生だけがわかる企画書になってしまっていた。企画書は、誰が見ても何がどのように行われるのかわかるようにしておかなければいけない。その点での学生の理解がまだ不足しているように感じられた。企画書は実習で指導者に目を通してもらうための物では決してなく、レクリエーションが事故なく、安全に行われるためのものであるという認識も学生に不足しているように感じられた。何のための企画書なのか、再度考える機会が必要であると感じた。

使用物品の準備についても不足が目立った。企画したレクリエーションを行うために何が必要なのか、綿密に考えられていなかった。例えば、模造紙に歌詞を書いてホワイトボードに貼り、歌を歌う企画を立てたとする。模造紙とホワイトボードは準備していても、模造紙をホワイトボードに貼るためのセロハンテープであったりマグネットであったりが準備されていない。他には、曲を流すためのMDラジカセとMDは用意されていても延長コードがないために自分たちが思った場所にラジカセが置けないといったこともあった。事前にコンセントの位置と、ラジカセのコードの長さ、場所の広さなど企画段階で確認する学生は2年間を通して一人もいなかった。車椅子の利用者が何人、いすに座る利用者が何人入って、どのような動きをするのか、その為にこの指定された場所は広いのか狭いのか、まずは確認する必要がある。そして、自分たちが考えたようにレクリエーションを進められるのか確認する必要がある。な

ぜならそれによって企画の変更もあり得るからである。レクリエーションを安全に行うためには欠かせない確認の一つひとつが学生にはまだ不足していた。

次に、「発表に集中してしまったために利用者の様子や全体に目が行き届かなかった」という反省があった。人前で話をしたり、進行したりするためどうしても緊張してしまい、自分のことだけで精一杯で、利用者の様子を観察することができなかったのである。司会者は利用者の反応を見ながら声のトーンを変えたり話題を変更したりしながら進行することが望ましいが、場に慣れていない学生がそのように落ち着いて進行することは難しいと考える。しかし、レクリエーション中に気分が悪くなる利用者や車椅子からずり落ちそうになる利用者など、様々な状態の利用者がいる可能性は大いにある。その時にはすぐに察知して対応しなければならない。その為進行しながら、利用者の表情や状態を確認することは必要なのであるが、司会者だけがレクリエーション援助をしている訳ではない。司会者以外の発表者や発表サポート役も同じくレクリエーション援助をしていることを忘れてはならない。援助をしている者全員で、利用者の様子を観察しなければならない。逆に言えば司会者はどうしても進行に集中してしまいがちなため、そのほかの援助者が司会者の分までも利用者の状態に気を配らなくてはならないと考える。そしてレクリエーションを進めながらも、利用者の援助をしているということを全員が忘れてはならないのである。援助している者全員の連携が重要なのである。「発表サポート役との連携がとれておらず、考えていたようなサポートをしてもらえなかった」という反省も多く見られた。発表者だけで行っているのでは決してなく、関わる者全員で作り上げているということを再認識する必要がある。その認識があれば、企画書の内容は読み手に伝わるように細かく記入され、発表サポート役とも打ち合わせを何度となく行い、連携もとれるようになると思う。

2) 利用者として

発表会では7種類（平成19年度は5種類）の障害を想定し、設定した。学生が実習中に出会ってくる利用者の中にその障害のある利用者がいると考えられる障

害を設定した。第2段階実習を終えた時期ということもあり、学生の中で高齢者の障害についての理解が深まってきており、障害にあわせた関わりを行おうという意識が感じられた。全盲の利用者には今何が行われているのか隣に座って説明をしたり、視覚障害の利用者は前列に座れるように配慮されていたり、難聴の利用者は司会者に近い席に座れるようにし、声が少しでも聞こえるよう配慮されていた。その為、障害の把握については比較的行っていたように思われた。利用者役からは「介助者のサポートによって気分が変わった」「声をかけてくれたり、笑顔で接してくれると安心できた」「全盲の利用者を体験したときに何がどこで行われているのかわからず不安になったが、隣で説明してくれて安心できた」というような意見が聞かれた。逆に「介護者が不安な顔でいるととても不安になった」「『このときにこうしてほしい』と思うことがたくさんあった」「片マヒの利用者の体験のときに『右手を動かしてください』と言われたが、右側はマヒ側だったためどうすればよいかわからなくなった」という意見もあった。

また「25分間、じっと座っているのがしんどかった」「体の動きが制限され、25分間を過ごすことにとっても苦痛を感じた」「歌を続けて歌うこと、体を動かすことの大変さに気付いた」「腰が痛くなり、体を動かすのも嫌になった」という意見があった。発表者の時の25分間は短く感じたが、利用者として過ごす25分間はすごく長く感じたようであった。

そのような中、「実習で出会った利用者のことを思い出した」という意見があった。実際に今まで自分が関わり、行ってきた一つひとつのことが、利用者にとどのような思いを抱かせていたのか、何気なく行っている声かけが利用者にとって辛いものではなかったか振り返る機会になったと考えられる。「自分たちが感じた辛さや苦しさは一時のものであった。しかし利用者の方の中には毎日毎日そのような苦しさを感じている方もおられるのだと体験を通して感じた」という意見も聞かれた。実習施設のほとんどの利用者が、学生が行うレクリエーションに積極的に参加してくれる。それぞれに障害があって苦痛を感じながらも、にこやかに参加し、時には学生を励ましてくれる。レクリエー

ション援助をしていることに違いはないが、利用者が一緒に行ってくれていることに対して、感謝の気持ちを忘れないことが大切なのである。



図1 利用者役の様子

3) 見学者として

大半の学生が「ここはこうすれば良いのと思うことがあった」と記述している。誘導方法から、利用者の座る位置、座る形態、説明の方法、声かけの内容や方法、発表者と発表サポート役の役割分担、利用者役のグループ分けに至るまで、様々なことに対して「もっとこうすれば」という思いを抱いていた。また、「これはいい、参考にしたい」という意見や、「発表者の目が行き届いていないのではないかと思うところがあったが、自分が実際に発表していた時のことを重ねると自分の反省点でもあった」という意見もあり、「他の学生の発表から学ぶ」「全体で学びを共有する」というねらいにそった学びがあったと考える。

その他には、「客観的に利用者や発表者の様子を見ることができた」との記述が2年間を通して多くあった。見学者という役割を作った理由は、少し離れたところから何の役割もなく見ることで、いつもは気付かない部分に気付くことができ、客観的に観察することができると思ったからである。そのため、結果的にはねらいにそった学びが得られたが、「客観的に見ることができた」と感じたその内容まで記述されている例は少なかった。これではその場で感じただけで終わってしまい、しばらくたって思い返したときに具体的にはならず、せっかくの学びが薄れてしまう可能性も考

えられる。次年度以降は、その内容を一人ずつが確認し、なぜそう思ったのかを明確にしていくが必要がある。

4) 発表サポートとして

発表サポート役という立場でレクリエーション援助に関わることは学生にとっては初めての経験だと思われる。実習先では常に「発表者」の立場であり、サポートの役割は自然と施設職員が担っている。実習中、知らず知らずのうちに現場の職員が行なってくれているため、学生はその重要性に気付いていない。サポートがなくては円滑にレクリエーションを進めることはできない。レクリエーションは実施者だけで行なっているものでは決してないということに気付くため、今回発表サポート役を経験することとした。

実際に経験して最も多かったのは、「どのようにサポートして良いのかわからない」「利用者質問されてもどのように答えたらよいかかわからない」「レクリエーションがどのように進行されるのかわからない」という意見であった。その他にも、「レクリエーション実施中に発表者にどうしたらいいと何度も質問してしまった」「発表の進行を妨げてしまった」「時間をもっと大事に使うべきだと感じた」という意見が大半を占めた。どのグループのサポートを行なうのかは事前にわかっていたのだが、発表者と発表サポート役の間での打ち合わせがほとんど行なわれていなかった。実施日当日になって少し言葉を交わすだけになってしまっていたのである。実施にあたって打ち合わせをするための歩みよりは、発表者からだけではなく発表サポート役からも必要であったが、それが行なわれなかったため、実施内容の伝達は徹底されず、発表サポート役は何をすればいいかわからないまま発表会を迎えてしまったのである。学生の意識の中に、「なんとかなるだろう」という考えがあったのだと思われる。実際に実習中は「なんとかなるだろう」という考えでも、周りの施設職員のサポートがあり、支えられていたために特に戸惑いもなく行なえたのだと考えられる。しかしそれは、介護現場と利用者を知り尽くした職員だからこそできることであると気付かなくてはならない。そのため、本来レクリエーションを行なうにあたって

は、関わるすべての職員に情報を提供しておく必要があるのである。何をどのように行なうのか、どのようなサポートを必要としているのか、伝えておかななくてはならないのである。

中には前もって打ち合わせを入念に行なったグループもあり、その学生からは「発表者の意図を把握し、それにそった援助を事前に意識できるとより良いと考える」「レクリエーションを行うにあたってサポートとの話し合いは非常に重要であることが実際にサポートになってみてよくわかった」という意見が聞かれた。そしてさらには、「主となって進める役も大切だが、それだけでは利用者に思いきり楽しんでもらえない。発表者が連携をとれていたならサポートに的確な指示を出すことができると思った」「利用者に対する配慮は大切だが、リーダーに対するサポートも大切だと思った。視野を広く持ち、利用者の表情に目を向けつつ、リーダーの動きにも目を向けていくことでスムーズにレクリエーションが進むと思う。サポートとリーダーがアイコンタクトをとり、次にすることを把握し臨機応変に対応することで連携がとれるのだと思う」と実施中の援助に関わる全員の連携について考えることができた学生もいた。

IV. 第3段階実習に向けて

発表会での学び、それぞれの立場からの意見は5段階評価とともに集計して、学生に提示し、企画書には発表会を見学していた教員が助言を記入して返却している。なぜなら、発表会中に学生同士のディスカッションの時間がとれておらず、それぞれの意見が授業内で



図2 レクリエーション発表会の様子

交換されていない現状があるからである。それぞれ体験したからこそ理解できた気持ちや学びを全体で共有するために、できる限りたくさん意見を集計して提示するようにしている。それを見ることで学生はまた自分の発表を振り返り、次の第3段階実習でのレクリエーションにつなげていくことができると考える。実習先には様々な障害のある利用者がいて、それぞれに応じた配慮が必要だということ、また利用者にかける言葉や援助の一つひとつが大切だということ、そして事前準備と連携の重要性など、学生が感じたことをそのままの言葉で表すことにより、自分たちの学びの成果として残すようにしている。

V. まとめ

第2段階実習が毎年9月に終了し、1月から始まる第3段階実習までは4ヶ月弱の期間がある。平成18年度は11月末に、19年度は10月末に発表会を行った。レクリエーション発表会を実施して4つの役割を体験し、学生はそれぞれの立場から主に「事前準備の大切さ」「連携することの大切さ」に気づくことができた。これはレクリエーションに限ったことではなく、介護全般や保育、その他どのような職業に就くにあたっても必要なことである。前もって企画し、物品をそろえ、メンバーと話し合いを行い準備することで、実施者自身の気持ちの準備もできると考えられる。もちろん計画通りに物事が全て進むわけではない。その日、その時に何が起るかは誰にもわからない。そのために様々な事態を想定して準備しておくことが必要である。

レクリエーション発表会に先立ち、実施のねらいとして「事前準備」「連携」とともに重要であることを学生に説明しているが、そこから行動に移すことができた学生は少なかった。さらにそのほかのねらいについても、聞いてはいても自分のこととして考えておらず、発表会を通して再度認識した学生がほとんどであった。学生は実習中、利用者や施設職員を目の前にし、現場での介護から日々様々なことを学び、吸収してくるのであるが、レクリエーションに限らずその学びが実習が終わるごとに途切れてしまうことが多いと感じられる。介護福祉士の資格を取得するにあたって、第1段階から第3段階までの実習は全てそれぞれが単独

している訳ではなく、繋がりをもっており、日々の授業内容も必修科目、選択科目に限らず利用者の生活を援助するための知識として全て繋がっているのである。

今後、2年間の実践結果をふまえ、レクリエーション発表会での学びが学生にとってより効果的なものとなるよう、研究を行っていきたい。

引用文献

- 1) 奥田真紀子・栗林千幸：介護福祉士の養成カリキュラムに関する検討，奈良佐保短期大学研究紀要，14，30（2006）